近現代哲学の認識問題から教化を考える

石伏叡齋

十六世紀以後のヨーロッパはルターによる宗教改革とそれに伴う戦乱の渦中にあった。一方、時を同じくして、自然哲学から自然科学が生まれた。自然科学の成果は客観的で共通了解を可能とするものであった。

宗教や哲学では自然科学のような客観的な共通了解は得られない。そこで主観・客観という認識問題が近代哲学の中心問題となる。

宗教戦争と自然科学の台頭の渦中にあって、デカルトは主観・客観問題の一致の可能性があり得ないことを主張した。どんな認識も主観の認識なので、誰も自らの主観を出て客観と一致してるかどうか参照することができないというものである。

その後、スピノザやライプニッツは合理的推論によって世界は必ず認識できるという独断論の立場をとる。対してヒュームはそのように世界を正しく認識できないという相対主義（不可知論）の立場をとった。それらの対立に対して、カントは物自体という回答を出した。人間としての共通認識は取り出せたとしても、あるがままの客観は全知全能の神以外は認識不可能というものである。

それに対して、「神は死んだ」と唱えたニーチェは全知全能の神のような認識も否定し、客観世界を終焉させてしまう。そしてフッサールに到って、一切の認識は信憑であるという現象学的還元に到る。これらが近現代の主要なテーマである認識問題の背景と当初の流れである。

さて、フッサールの現象学的還元について掘り下げてみる。デカルトは「我思う、故に我あり」という有名な言葉を唱えた。この世の全てを疑ってみても、疑っている自分の意識の存在だけは疑えないというものである。その思考から導き出される世界は次のようになる。普通に考えると世界（主体）の中に自分（客体）がいるのであるが、デカルトでは逆に、世界を認識する自分が認識の主体であり、自分が認識する世界は客体となる。

さらに、フッサールの現象学的還元によればこうなる。普通に考えると、客観が原因で主観が結果となる。つまり、「世界はこのように存在するから（客観）、私は世界をこのように思う（主観）」というように。ところが、現象学的還元では、順序が逆になる。主観が原因となって客観が結果になる。すなわち、「私は世界がこのようなものと経験するから（主観）、私は世界をこのようなものとして認識する（客観）」というように。

要するに、我々はいろんな仕方で主観の認識を作っていて、ここから客観はこうだという確信を作り上げているだけということになる。一切の認識はそのような信憑（主観の確信）であるというものだ。

それを今の日本人に当てはめて考えるとこうなる。宗教団体の運営する私立の学校などを除いて、小学校、中学校、高等学校で宗教の教育はなされない。そんな教育で育った戦後の日本人が今は人口の大多数である。祖父母の世代も

そんな世代であるから、家庭でも宗教的な情操を育む機会がない。現象学的還元から述べると、そんな環境で育った子供たちは、宗教から隔絶された世界観を客観的世界だという信憑（主観の確信）を形成している。直葬、墓は要らない、菩提寺に行かない。言い換えると葬式離れ、墓離れ、寺離れの三離れの根本となる認識である。

そこを何とか教化しなくてはならない。教化というのは仏法の本質について認識を得て共通了解を得ることであろう。ここでは、難信難解ではあるがこれが真理だ、以信代慧だ、行浅功深だ・・・といったことを肯て離れて、キリスト教の凋落と自然科学の台頭ともに起こった近現代哲学の認識問題から考えを進める。

ニーチェにしても、フッサールにしても、世界の真理という意味での客観世界は存在しない。それではどのような認識の世界があるのか。フッサールの現象学では一切の認識は信憑であるとして、その信憑の認識には三つの間主観的な相がある。

①主観的確信
②共同的確信
③普遍的確信

①主観的確信とは、共有されない一人だけの個人的な確信や信念といった主観的な確信である。②共同的確信とは、二人以上の複数に共有された共同的確信である。宗教も宗派ごとに認識が異なりその意味では普遍的な確信とはなりえず共同的な確信となる。そして③普遍的確信とは、普遍的に共通了解を得られる確信である。自然科学や論理学が

それに当たる。

共通了解が成立する普遍的な確信の領域はともかく、それが不成立の個人の主観や限られた集団での共同的な確信の領域では、違った様々な異なる認識があり、それぞれ相容れないものがある。

そのような信仰の世界は、①主観的確信②共同的確信と位置づけられてしまう。そうなると、それぞれが自らの宗教や信仰の絶対性を互いに主張しあっても収拾はつかない。近世以前なら棲み分けも可能であっただろうが、地球が狭くなった現代では宗教対話による共存の道が関の山であり不可欠である。

一方で、普遍的確信といった共通了解が成立する領域は自然科学、論理学である。これを指摘すると、自然科学と仏教の親和性や類似性から、仏教の共通了解の成立を試みられないかという指摘もありそうである。しかし、この点について花園大学の佐々木閑教授は「犀の角たち」にて、

> 確かに、科学と仏教のひとつひとつの要素を見ていけば、似ている点は見つかる。しかし実際には、その何百倍も何千倍も、似ていない点があるのだから、個々の類似点をもって、両者の相対的類似性を主張することなどできない。
>
> 佐々木 閑『犀の角たち』三頁

と述べている。物理学科出身の筆者としても何か仏教と物理と類似性を調べ、そのことで仏法の普遍性を述べて教化

に役立てられないか調べてきた。しかし、この通りで不可能であると考えるに到っている。

ともかく、一生懸命教義を学び、信行に励んで、教化力を高めて、信徒を増やし感化を及ぼすことに勲功があっても、一天四海皆帰妙法に到るような共通了解は得られない。少なくともニーチェやフッサールによる認識問題への回答からはそう指摘せざるを得ない。

もちろん、手立てが全くないわけではない。

釈尊が創成した本来の仏教は、我々が想像する以上に合理的なものであり、神秘の影はきわめて薄い。そして、科学と同じ土俵に上がって四つに組むことができるのは、その本来の仏教だけなのである。

佐々木 閑『犀の角たち』四頁

ここでいう本来の仏教とは、インド仏教学でいうところの原始仏教である。先述の共通了解が成立する領域は、自然科学と論理学である。原始仏教の論理的な部分を教化に活用して、共通了解の足がかりにならないかと考える。更に普遍的確信に到るためには、原始仏教を記号論理学の言語に翻訳を試みてはどうかと考えている。

「不受余経一偈」に反するかもしれないが、私はつくづく教化の場面で感じ入ることがある。それは、数十年前までの檀信徒は仏教や法華仏教の極基礎を知っていた。だから、お題目を結論とする法話もしやすかったかも知れない。しかし、今の檀信徒は未信徒と同じである。法華信仰の未信徒ではない。仏教の未信徒なのである。

よって、普遍的確信に到るような共通了解の成立する領域、あるいはそれに近い共同的確信に到るような領域に誘引し、しかる後に法華仏教の本質を説くという手立てが必要であると考える。また、原始仏教から法華仏教への誘引の過程にあってはインド仏教学やその見地からの梵本法華経の知識も必要になると考える。それは種智院大学の苅谷定彦名誉教授の講義を東方学院で受講した筆者として常々考えることである。

従前の、寺院と檀徒の関係は寺請制度の寺檀制度の名残であった。そして、明治維新以後その絆は死者儀礼であった。また、檀徒も信徒も木剱修法や占いを駆使するなどした祈祷系の信徒であるかも知れない。それも大切なことであるが、現代に到ってもそのバイアスが強くて、仏教の本質なかんずく法華仏教の素晴らしさを説こうにも難しいものがある。そう考えると、彼らにすら普遍的確信に到るような原始仏教の共通了解が成立する領域は必要であると考える。

最後に、今後の課題について述べておく。デカルトの、自分が認識の主体であり、自分が認識する世界は客体となるという考え方や、フッサールの現象学的還元は、どことなく己心に三千世界が具足するという一念三千の法門に通じるものがあるのではないかという期待があり、そのあたりを深く掘り下げてみたい。

また、フッサールの現象学還元にはエポケー（括弧入れ）という作業がある。実存する疑えない唯一の私の感覚器官から感じる形容的なものは疑えない確実なもの。たとえば、仏壇に供えられた仏花の菊（のようなもの）を見て、花弁は白と黄色があり、葉は緑色といった感覚は疑えない。しかし、そこから発する確信は不確実である。菊だと思っても、よくできた造花かも知れない。感覚器官で感じたことは疑いようのないことであるが、そこから来る確信

（認識）は不確実である。前者のエポケーされた感覚から現象学的に妥当な認識、普遍的な認識を得られる可能性がある。このことと如実知見との関連を研究するのも面白いと考える。というのは、仏教の行（*saṃskāra* 形成作用）との対比を試みることができそうである。「無明は行に縁たり、行は識（認識作用）に縁たり…」の十二因縁の「行」である。この行とエポケーを絡めて如実知見と現象学を対比する研究も面白く有用かも知れない。それだけではなく、そこに「認知神経科学」「錯覚の科学」といった方面からも認識問題を考えること。これらは基礎的な仏法の現代的理解や教化に役立つものに違いないと考える。

更に、認識問題のハイデガーやそれ以後の展開である。実存論哲学、ポストモダン思想と仏教ということも考えなければならない。それらには現代人の思考の潮流に大きな影響があり、現代人に恩恵だけでなく苦悩をもたらすものである。その特質の源泉を鑑み研究することは現代人への教化にとって欠くべからざることと考える。

総じて、教化は仏法を正しく認識していただき、共通了解を得ることと考える。一天四海皆帰妙法は普遍的確信の認識であろう。だから認識問題の切り口ははずせない。その観点から研究を続けていく所存である。しかし、認識問題ひとつをとっても、哲学はあまりに難解かつ膨大な思考の大海原であり、底知れぬ世界である。今般はその入口を示すに留まってしまったこと、またそうならざるを得なかったことをお許しいただきたい。

参考文献

「現象学は思考の原理である」竹田青嗣　ちくま書房
「超解読！はじめてのフッサール　現象学の理念」竹田青嗣　講談社現代新書
「竹田教授の哲学購読21講」竹田青嗣　みやび出版
「哲学用語図鑑」田中正人　プレジデント社
「年表で読む　哲学思想小辞典」ドミニク・フォルシェー　白水社
「１００分で名著　ニーチェ」西研　ＮＨＫ出版
「近代科学の源流」伊東俊太郎　中公文庫
「犀の角たち」佐々木閑　大蔵出版
「「諸行無常」再考」鈴木隆泰　山口県立大学國際文化學部紀要 10, 21-31, 2004-03-25
「自然科学と仏教」現代宗教研究　第四十六号